

# 『雲隠六帖』 雲雀子巻と和歌的世界の交渉 （梗概的であることを視点に）

咲本 英恵

はじめに

『雲隠六帖』は、雲隠・巢守・桜人・法の師・雲雀子・八橋の六巻で構成される『源氏物語』受容テキストであり、作者未詳、中世に成立したと考えられている。光源氏や冷泉院・薫・匂宮といった『源氏物語』の主要男性登場人物たちが、肉親や恋人といった愛する人々との死別によって仏道に目覚め、出家しあるいは在家のまま、開悟・往生・成仏してゆく物語であり、仏教によって苦しみ、無い死を遂げていくという仏教的救済の様々なありかたが追求されている。

院政期以降、『源氏物語』は、世の無常をあらわした物語として享受され、作者紫式部は観音の応身であるという説までもが生まれた<sup>(1)</sup>。『源氏物語』を仏教的に解釈してゆこうとするそうした風潮のなかで、『源氏物語』は天台宗の經典六十巻（天台六十巻）と結びつけられ、じつは『源氏物語』は六十帖あるという「源氏物語六十帖説」も生まれてゆく。『源氏物語』の古注釈書や梗概書には、そうした『源氏物語』六十帖説をめぐる言説――『源氏物語』享受のありようがさまざまに見て取れる<sup>(2)</sup>。

小川陽子氏は、そうした『源氏物語』享受のありようとして、実際には五十四帖しか存在しない『源氏物語』にほんらいあるべき六帖を追加しようとして創作されたのが『雲隠六帖』であるとし<sup>(3)</sup>、その文体・内容の梗概書との近似性について次のように論じる。

短文を重ねて出来事の筋のみを追うという叙述の方法、また各巻が非常に短く、六巻合わせてようやく『源氏』の一巻に相当する態度という本文の分量は、梗概書に非常に近いことに気付く。内容面から見ても、（略）『源氏』の詞に寄り添おうとする正統派の享受ではなく、自由に『源氏』を膨らませ、時には改作した梗概書を補うあり方に通じる。『雲隠六帖』は傍流の『源氏』享受の中で構想され、『源氏』そのものではなく、梗概書を補う存在として創作されたものとして捉えるのが妥当ではないかと考えるひとつの所以である。（傍線は稿者、以下同）

氏はさらに、『雲隠六帖』が依拠した本文は『源氏物語』梗概書のひとつである『源氏大鏡』の類であろうと考察したうえで、『源

氏小鏡』や連歌とのかかわりについて次のように述べる。

梗概書の中でもっとも流布したのは『源氏小鏡』であるが、源氏寄合に関する記述の有様（『雲隠六帖』には全く連歌に関わる要素が見えない）や、『雲隠六帖』の作中和歌が依拠した『源氏』の和歌との兼ね合い（『源氏』の和歌八首に依拠して作中和歌を新作したと思われるが、うち『源氏小鏡』が収載するのは二首のみ）その他を考え合わせると、『源氏小鏡』と『雲隠六帖』とが関わった可能性は低いと考えられる。

梗概書とは、中世の人々が長大で難解な『源氏物語』を知る手段として用いた、『源氏物語』を質・量ともに簡易な形で伝える書である。

鎌倉時代に『六百番歌合』の判者・俊成が「源氏見ざる歌詠みは遺憾のことなり」と『源氏物語』を位置づけて以来、歌詠みたちは、『源氏物語』を知らざるを得なくなり、梗概書は和歌や連歌寄合、秘伝など、それぞれ重視するものの違いによって多様に展開していった。そのなかでも、『源氏大鏡』は『源氏物語』の全和歌と比較的長い粗筋を収載したダイジェストであり<sup>(4)</sup>、「短文を重ねて出来事筋のみを追」いながら和歌が配される『雲隠六帖』の文体と近いという小川氏の指摘には肯首される。ただ、小川氏が、『雲隠六帖』の流通に連歌師がかかわった可能性をも論じていることをふまえると<sup>(5)</sup>、『源氏小鏡』や連歌と『雲隠六帖』との関係は、簡単には否定できないように思われる。

本稿では、『雲隠六帖』の梗概（あらすじ）的ありようを具体的に示し、それを読み解くことを通して、『雲隠六帖』と連歌のかかわりを考えてみたい。その試みの端緒として、『雲隠六帖』の第五帖・雲雀子巻を扱うことにする。そのうえで、『雲隠六帖』が梗概的文体であることの意味についても考えることができたいと思う。

#### 1. 嵯峨院から小鷹狩へ

雲雀子巻には、『源氏物語』には存在しない薫の息子・少将の君が登場する。またその内容は、法の師巻で語られた匂宮帝の息子や薫内大臣の娘の死、薫・浮舟夫妻の出家を受けている。女二宮と薫とのあいだに生まれた少将の君は、「生きていてくれたらよいのに」と思う人ばかりが多いこの世の中で、薫の面影を残しながら、一族の長として浮舟や宣旨の君とのあいだにできた薫の子どもたちの面倒を見ている。

次に雲雀巻の全文を載せる。本文は、蓬左文庫寄託本堀田文庫蔵本『雲かくれ』（『雲隠六帖』）を、小川氏による校異を参考にしつつ私に校訂した。

世の中いと物騒がしく、あらましかばと思ふ人のみ多く、恋かなしみたてまつり給ふこと限りなし。大臣の二の宮の御腹の少将の君、昔おぼゆる御気配いとなつかしげにて、かの三條の君たち心すげにおはするを、心苦しき物にこのかみ心にあつかひ給ふをぞ、世人もあはれにかたじけなき事に思ひ聞こえけ

る。

弥生の十日ばかりにやありけん、嵯峨院にまうで給ひて、帰さに、御供なる人々に遠矢ども射させて見給ふに、群草の中より、雲雀の鳴きのぼる声、いとはかなく聞こえければ

いづくをか宿と定めて雲雀子のこの草叢を鳴きて出らん昔、この野にて小鷹狩し給ひし日、雪いたう降りしに、左衛門督時重が、みづから「ひとりにも積もる雪かな」と言へるを聞き給ひて、故大臣の詠じ給ひしぞかし。

〔A〕おしなべて積もる深雪をなどされば我が身ひとつと聞きわぶらん

〔おはしますとも、いまだ友鏡にはなり給はじ物。顔かたち見にくかりしさへ、見るほどはつきなくは見えざりしぞかし。さもなまめかしう、優なりしかたはすぐれ給ひし物を。おはせまししかば、いかに甲斐あらまし〕などと思ひうつしのたまふ。折ふし、雁鳴きて渡りければ、

〔B〕雪消えし跡をしたへばおしなべてこの世はかりと告げ渡るかな

帰り給ひても、昔の御面影いと添ひたるやうにて、硯箱を枕にて、うち臥し給へるに、麗しき香の法服、東京錦とおぼしき袈裟かけ給へる人、「やや」と起こし給ふを、「誰ぞ」と言ひて見るに、ありし御気配いささか衰ふることなくて、昼の御返事と思しくて

〔C〕おしなべてかりと悟らばとく捨てて心涼しき国に生まれよ御返事申さんと思ふほどに、夢醒めぬ。「さては昼の野

にも天翔りてこそ聞きたまひけれ」と、いとどこの世を振り返り見給ふほどもあり難く、「いかでこの世を早く捨てよとの給ひし心聞き届けたてまつらん。されども、御跡もなく荒らし果てんことは、名残も悲しく」などとぞなん。（『雲かくれ』雲雀子 卷三一ウ〜三三ウ）

少将の君は、生前の薫を述懐して世の無常を観じ、夢で僧形の薫に仏道修行を勧められ、なんとしても薫の思いに添いたいと思うが、いっぽうでは父の子孫を絶やしたくないという思いに揺れる。雲雀子巻は、子孫を残してから出家する少将の君の未来が暗示されるかたちで幕を閉じる。愛する人との死別が仏道に目覚めるきっかけになるという点では他の巻に通じるものの、主人公もエピソードも『源氏物語』の内容と直接関わらない、『雲隠六帖』のなかでも特異な巻である。

さて、弥生の十日ばかりの日、少将の君は光源氏ゆかりの嵯峨院をもうで、その帰りがけに嵯峨野で供人に遠矢を射させた。まずはこの物語冒頭の場にどのような意味が読み取れるのか考えて見たい。

嵯峨院は、『雲隠六帖』第一帖・雲隠巻において、西山で出家した光源氏が六条院とともに一年に三度ばかり様子を覗きに訪れた、光源氏の現世執着を象徴する建物である<sup>(6)</sup>。光源氏は表向き、少将の君の祖父にあたる。『雲隠六帖』は、光源氏―薫―少将の君という権勢家の一族として少将の君を描くことで、少将の君の、不義密通という罪の子・薫の血筋を暗に浮きぼりにする。

遠矢とは遠距離にある標的を射ること、およびその矢のことを言う。入江康平氏によれば、飛距離はあるが破損しやすく、熟練者向きとされる矢だという<sup>(7)</sup>。軍記にその用例が見えるが、次の用例から狩猟、しかも体躯の大きな獲物を狙う時にも使われたであろうことが想像される。

川浪に面影の見ゆる程は跡をしたひしが、はるかになりぬ。隣の者どもこれを見付け、「大鳥なるぞ」と弓稽古の若侍、おとらじと遠矢をはなつ。〔男色大鑑〕三三〇〕

遠矢を射られ驚いたのであろう、空に鳴きのほる雲雀は、春夏にかけて巣を営み子を育て、とりわけ春には空高く一直線に飛び上がり、地上へ落ちくるかのように戻ってくる習性があるという。歌ことば「雲雀」には、旧稿で述べたとおり、子を思い空高く飛んで巣立つことを教える親鳥の、あるいはまた、子を思う闇に囚われ巢に落ちてくる親鳥のイメージがあった。そういう雲雀に、子である少将の君を思い、夢枕に立ってまで仏道修行へと導こうとする父・薫を重ねようとする意図が物語作者にはあったろう<sup>(8)</sup>。ただ、従者に遠矢を射させて狩猟を楽しむ少将の君は、権勢家の一族であり、罪の子の血を引くだけでなく、殺生という仏教的罪を犯す俗人としてこの物語に登場している。

ところで『源氏物語』においては、嵯峨院は「光源氏が」世を背きたまひし」場所〔『源氏物語』⑤宿木巻・三九五〕であり、さかのばれば、内大臣として栄華の道を歩みつづけた光源氏が世の

無常を観じて「山里ののどかなるを占めて、御堂を造らせたまひ、仏經のいとなみ添へてせさせたまふめる」〔『同』②松風・三九二〕場所と語られる「嵯峨野の御堂」のことでもある。次のように、それは光源氏と明石の君の逢瀬の口実に使われた。

〔光源氏は紫の上に〕「桂に見るべきことはべるを、いさや、心にもあらでほど経にけり。とぶらはむと言ひし人（明石の君）さへ、かのわたり近く来ゐて待つなれば、心苦しくてなむ。嵯峨野の御堂にも、飾なき仏の御とぶらひすべければ、二三日ははべりなん」と聞こえたまふ。〔『源氏物語』②松風・四〇九、括弧内は咲本）

ただ、点線部のとおり、光源氏が「嵯峨野の御堂」のほかにも所持する「桂の院」をも、明石の君を訪れるための口実にしていることには留意しておきたい。このあとには、光源氏と明石の君の三年ぶりの再会、その翌日の桂の院での月の宴、そこでの冷泉帝との和歌贈答などが描かれるが、とりわけ、小鷹狩のために月の宴に後れてやってきた殿上人が獲物の小鳥を光源氏に献上する次の場面は、とくに絵画化され、広く受容された<sup>(9)</sup>。

なにがしの朝臣の、小鷹にかかづらひて立ち後ればべりぬる、いかがなりぬなむ」など言ふ。今日は、なほ桂殿にとて、そなたさまにおはしましぬ。にはかなる御饗応し騒ぎて、鶺鴒ども召したるに、海人のさへづり思し出でらる。野にとまりぬる君

達、小鳥しるしばかりひきつけさせたる萩の枝など苞にして参れり。〔源氏物語〕②松風・四一八

こうしてみると、「桂の院」ではなく「嵯峨院」が『雲隱六帖』で狩猟や殺生と結びつくのは唐突な気もするが、これには『源氏物語』享受のありようが関わっていたと考えている。

というのも、『源氏物語』では松風巻以降「桂の院」が登場しないためか、『源氏物語』享受世界では嵯峨野の御堂と桂の院の位置関係の把握に混同が見られるのである。

すなわち、正統派の『源氏物語』享受と言われる『弄花抄』は、「かつらにみるべき事あるを」という項目を立てて「嵯峨に堂たて給ふを大やうにかつらとの給ふにや 又桂院など修理の事も有しにやとみゆ」とする<sup>10)</sup>。一方で、傍流の享受と言われる梗概書世界では、『源氏大鏡』が「源氏、この頃さかに御だうをたて給て」「かつらの院とは大井よりこえつゝきの所也、是も源氏のしり給ふ所也」と、嵯峨野の御堂と桂の院を別々の場所として把握するのに対し<sup>11)</sup>、『源氏小鏡』が「さてそのころけんしかつらにみたうをいかめしくたて」と、両者の位置を一括りに把握する。興味深いのは、『源氏大鏡』が小鷹狩人の記事を省くのに対し、『源氏小鏡』(連歌の手引書としての性格が強く、短い粗筋とともに源氏寄合を載せる梗概書)が「又このまきにこたかかりといふ事あるへし」「こたかかりしてことりともおきのゑたにつけたる」と続けることで、これは『源氏一部抜書』(同じく連歌の手引書性格の強い梗概書)松風巻の項に見える「かつらのさと」「いかめしきてらつく

り」「小たか」「ことりつけたるおきのえた」という源氏寄合とも通じている<sup>12)</sup>。

和歌や物語の筋を丁寧伝えることを重視した『源氏大鏡』が「嵯峨院」を的確に伝え、和歌と直接関わらない小鷹狩の場面を無視した一方で、連歌の世界は嵯峨野の御堂を桂にあるものと捉え、小鷹狩人に注目した。結果として「御堂」は小鷹狩・小鳥つけたる萩(小木)の枝と、源氏寄合として結びついてゆく。雲雀子巻では、少将の君が「嵯峨院」からの帰りに狩をし、過去の「小鷹狩」を思い出すが、このことは、雲雀子巻作者が『源氏大鏡』系の梗概書(あるいは『源氏物語』そのもの)も、『源氏小鏡』系の梗概書も見聞きしていたことを示しているのではないだろうか。文体は『源氏大鏡』に近くとも、その発想には、松風巻の源氏寄合のような、ウタの連想体系があつたことを感じさせるのである。

なお『源氏物語』の古注釈『原中最秘抄』や『河海抄』などには、「宇治宝蔵日記云、永観年中、朱雀院へたてまつる小鳥、萩の枝一すぢに雲雀五を、馬尾にて鼻をとをしてならべ付たり」と記されており、雲雀も松風巻と無縁ではない<sup>13)</sup>。このように「嵯峨院」を軸に考えると、雲雀子巻冒頭が『源氏物語』享受世界における松風巻の連想体系と強く結びついていることがわかる。

## 2. 小鷹狩から友鏡へ

さて物語の焦点は、少将の君の思い出のなかで、季節外れの雪のさなか「ひとりにも積もる雪かな」と言った「左衛門督時重」によって小鷹狩そのものではなく雪に当てられてゆく。このせりふの



引歌らしき和歌は見出せないが、次のように、積もる雪は白髪<sup>ハクハツ</sup>の比喩となり、和歌連歌において「老い」をあらわすものであった。

しら雪の八重ふりしけるかへる山かへるがへるも老いにける

〔『古今集』巻十七・雑上・九〇二・寛平御時后宮歌合の歌・

在原棟梁

ふりにける頭の雪を見る人もおとらずぬらす朝の袖かな〔『源氏物語』①末摘花・二九七）

23 かきほのくすにまじる卯花

24 薄雪<sup>ウスユキ</sup>や野へのかつらにかゝるらん

25 かみ白くして物哀なり〔『文安月千句』何路第五／文安二年八月十五日）<sup>〔14〕</sup>

雲雀子巻の時重は、「おしなべて」雪が降るなか、「ひとりにも」雪が積もると言ったが、それは単に雪が降っているというだけでなく、時重が白髪だということであった。「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき」（古今・巻一・春歌上・八・文屋康秀）を筆頭に、和歌には自らの白髪を嘆き、対比的に相手を賛辞する型がある。時重はその型に乗せて「ひとりにも積もる雪かな」と言うことで、老いた自分とは比べ物にならないくらい素晴らしい主君・薫を賞賛したのである。

それを受けて、薫はA「おしなべて積もる深雪をなどされば我が身ひとつと聞きわぶるらん」と詠じる。一面に、みんなの上に雪は

降っているのに、どうして自分一人にだけ降ると思つてつらそうにするのだ、と薫は時重に詠みかけている。この歌は賛辞に対する謙遜であると同時に、自分も同じように老いるのだという無常観を表している。一面に雪が降りしきる狩場の情景の中に、薫の優美な姿と、この世の無常観が浮かび上がる。

記憶はここで終わり、「おはしますとも」以降、波線部のように現実の少将の君の、薫への思慕が吐露される。「父（薫）がいらっしゃったとしても、いまだ友鏡<sup>トモカガミ</sup>にはおなりにならないだろうに。容姿が醜<sup>みにく</sup>かった者（時重）さえ、本人が見ているほどはいやなふうには見えなかったのに。（父は）あんなふう上品で、優美だった様子は優れていらっしゃったものを。父がまだ生きていらっしゃったなら、どんなに甲斐があつたらうか」と解釈できるであろう。従来、『雲隠六帖』研究において「ともかゝみ」の解釈は注目されてこなかったが、次のように、早くは『貫之集』に見えた歌言葉であった。

841 さいそうの中将のみもとに老いぬるよしをなげきて  
ふりそめてともまつ雪は烏羽玉の我がくろかみのかはるな  
りけり

返し 兼輔朝臣

842 くろかみの色ふりかはる白雪のまちいづるともはうとくぞ  
有ける

又返し

843 黒かみと雪とのなかのうきみればともかがみをもつらしと

ぞ思ふ

貫之の、「降り始めて友を待っている白雪は、かつてのうばたまのようだった私の黒髪の色が変わったものでした」という贈歌に、兼輔は「黒髪が白色にかわってしまった白雪のようなあなた。あなたが待っている友（私）は、あなたとはとうとうとしいのですよ」と返歌する。自分はまだ白髪にはならないぞとからかう歌である。貫之はまた返歌する。「黒髪（のあなた）と白雪（のような白髪のわたし）」との仲が悪いものであるところを見ると、友鏡（合せ鏡）のように仲のよいはずの友とはつれないものだと思います」。老いをたねに冗談を言い合う二人の仲の良さがしのばれる一連の贈答歌である。この三首は『後撰集』巻第八（冬・四七一〜四七三）にも採取されており、四七一番歌（『貫之集』八四一番歌と同歌）には「雪の朝、老を嘆きて」という詞書が付されている。片桐洋一氏は四七三番歌の「友鏡」について、「二つの鏡を利用して自分の体の見難い所を見ること。今に言う合せ鏡のこと」と付注する<sup>(15)</sup>。が、十二世紀末成立の歌字書『袖中抄』には、「友鏡」は次のように自分と相手の髪の白さを指す言葉と示されている。

一、ともかゞみ 付友ま  
つゆき

くろがみとゆきとの中のうきみればともかゞみをもつらし  
とぞおもふ

顕昭云、ともかゞみとはわがゝみ、人のかみの白を雪に見あは  
する心也。（『袖中抄』第十五）<sup>(16)</sup>

そしてこの歌言葉の用法は連歌にも引き継がれ、『古活字版和歌藻塩草』や『俳諧類船集』に収載されてゆく。

29 かきくもるゆきのうちよりかつはれて  
30 ともかかみにそなみたなくさむ  
31 みかくともひとりとはこころなにならむ（大永年間百韻何木）

82 おいかうへにもこひはくるしも

83 をりをりのなみたなくさむともかかみ

84 おもひつものふちせとそなる（文禄二年千句第五何目）

少将の君は薫について、「おはしますとも、いまだ友鏡にはなりたまはじもの」と思う。つまり薫が生きていたとしても、「友鏡」すなわち時重ほどの白髪にはなっていないであろうというのである。「なまめかしく、優なりし」薫の、年月を経てなお若々しい姿を少将の君は思い浮かべている。この展開は和歌連歌の連想体系のなかにある。

3. 雁から死者との交信へ

そして少将の君が薫を思う、その「折ふし、雁鳴きて渡」る。例えば、「待つ人にあらぬものからはつかりの今朝なく声のめづらしき哉」（『古今集』・巻四・秋歌上・二〇六・在原元方）や「人を思

ふ心は雁にあらねども雲居にのみもなきわたる哉」(『同』・卷十二・恋歌二・五八五・深養父)に見えるように、人を恋しく思う時に雁が鳴くという和歌の連想がある。少将の君が薫を思う、その直後に雁が鳴くという展開は、こうした歌言葉の連想に支えられているよう。

雁の声に促されるかのように、少将の君は[B]歌「雪消えし跡をしたへばおしなべて此の世はかりと告げ渡るかな」を詠んだ。「行き帰りこもかしこも旅なれや来る秋ごとにかりかりと鳴く」(『後撰集』卷第七・秋下・三六二・題しらず・よみ人しらず)という歌があるように、雁は「かり」と鳴くらしい。つまり少将の君は、「いまはもう雪の消えたかつての狩獵場を慕って父薫を思い出している」と、すべて一様に、この世は仮のものであると雁が告げて鳴き渡る」と独りごち、「なまめかしく、優なりし」姿だった父がいまや居ないのだという無常観にうちひしがれたのだ。その無常観はたんに薫を偲ぶ思いのみから出てきたものではなく、「仮」に通じる「雁」という音の連想が働いた結果でもあらう。

そして、その[B]歌は、終盤の薫の詠歌[C]「おしなべてかりと悟らばとく捨てて心涼しき国に生まれよ」と呼応することになる。[C]歌は、「この世はすべて仮なのだ」と悟ったならば、早くこの世を捨てて、心涼しき国、すなわち苦しみの無い御仏の国に生まれてくるがよい」という、夢のなかで与えられた啓示だが、少将の君はこれを、薫が「昼間の野にも天翔りてこそ聞きたまふ」た[B]歌への返歌と捉えている。

このように、この二人の交信は「雁」という歌言葉によって支え

られているわけだが、それには次に示すとおり、雁が春には南方へ向かうものであると同時に、「常世」を往來する鳥だと考えられていたことが大きく関わっているよう。

一、とこよのくに(略)然後拾遺秋上云、ひさしうわづらひけるころかりのなきけるをきゝて詠る

おきもぬぬわがとこよこそかなしければるかへりにしかりもなくなり

是は赤染衛門歌也。此歌に付て雁は常世國よりきたる鳥也と云、髓腦等あり。(『袖中抄』第五) (17)

次の連歌寄合を見ても、「雁」が「常世」と密接な連想体系にあることがわかる。

365 鴈トアラバ、(『連珠合璧集』)

玉章 舟 數 涙 雲井 衣 田 落る ことぢ 友よ  
ぶ 思つゝぬる とこよ 都 (18)

鴈(雁)の寄合のなかに「玉章」(傍線部)とあるのは、匈奴に捕えられた漢の蘇武が雁の脚に手紙を結びつけ、自らの無事を都に知らせたという『漢書』に見える雁信の故事に拠っており、そこから「雁の使ひ」「雁の玉章」という言葉まで生まれた。雲雀子巻の場面には、常世を往來する雁が、常世(異界／あの世)にいる薫へ少将の君の想いを伝えたというイメージが託されているということ



だろう。

さらに注目したいのは、「雁」に対する「思つ、ぬる」(波線部)という寄合である。雁の声を聞いて帰宅したあと、薫の「昔の御面影」が身に添うような状態で、少将の君は硯箱を枕にして眠る。「面影」とは相手から思われたり相手を思うときに見える(幻視する)ものであり、そう考えるならば、少将の君は薫を「思ひつつ寝」たことになるだろう。古来、夢は思う人と会うための通い路であり、だから少将の君は夢のなかで薫と出会うのである<sup>(19)</sup>。雁の音を聞き、硯箱を枕にして寝る少将の君の行為や、彼と薫の夢での邂逅は、一見唐突な場面転換に見えながら、歌言葉の連想体系を知る者にとっては、一種の型<sup>(ハナ型)</sup>のような展開だったのではないだろうか。

さてC歌のあと、少将の君は薫に対し、その勧進に従いたいと思う一方、「家」が断絶してしまうことへの戸惑いを抱く。少将の君は、まずは一門の長として現世での役割を全うしようとする。そこに現世執着の思いを断ち切ってから出家することの理想性が託されている。

#### 4. 雲雀子巻の創作方法

雲雀子巻は、俗人として生きてきた少将の君が、薫の勧めによって仏道に目覚めてゆく物語である。それは四つの場面で構成された。すなわち少将の君が、I春の野で狩獵をし、雲雀を見て和歌を詠ずる場面、II雪の日の小鷹狩のできごとを回想する場面、III雁の鳴き声によって現実に引き戻され無常を悟る場面、IV帰宅後、夢

の中で薫と邂逅する場面である。それぞれ、I現実・春の野・昼、II過去回想・雪の日・昼、II現実・春の野・昼、III夢・夜というように、短い物語の中で季節や時間がすばやく転じる。梗概書的と言われるゆえんである。

第一節から第三節において確認したとおり、このような場面転換は、歌ことばのイメージや、その連想体系と密接なつながりがある。

そして、こうした歌ことばやその連想(縁語等)を連ねた散文は、『源氏物語』をはじめ、それ以前・以降の物語に無数に見ることができ、それについてのさまざまな論考もある。

だが、たとえば次のような『源氏物語』の文章を雲雀子巻と比較してみたい。

a 御耳とまりて、門近なる所なれば、すこしさし出でて見入れ  
たまへば、大きな桂の樹の追風に祭のころ思し出でられ  
て、そこはかとなくけはひをかしきを、ただ一目見たまひし  
宿なりと見たまふ。ただならず、ほど経にける、おほめかし  
くや、とつつましけれど、過ぎがてにやすらひたまふ、をり  
しもほととぎす鳴きて渡る。(『源氏物語』②花散里・  
一五四)

b 須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、  
行平の中納言の、関吹き超ゆると言ひけん浦波、夜々はげに  
いと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋

なりけれ。御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただこもとに立ちくる心地して、涙落るともおぼえぬに枕浮くばかりになりにつけり。琴をすこし掻き鳴らしたまへるが、我ながらいとすこう聞こゆれば……〔源氏物語〕②須磨・一九九

a に引用した花散里巻本文は、「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（古今集・夏・読み人知らず）」、「橘の花散里のほととぎす片恋しつづ鳴く日しそ多き（万葉集・一四七三・大伴旅人）」などに見えるような「橘」「ほととぎす」の和歌的イメージを多分に利用した物語である。「桂」は、その枝に葵をつけて御簾にかけたり挿頭にしたりする葵「祭」を連想させ、逢瀬すなわち過去に「見」た女性を光源氏に思い起こさせてゆく。そこへ、昔を偲んで鳴くとされる「ほととぎす」が鳴き、我が身をほととぎすに重ねた光源氏は女（通称・中川の女）に歌を贈る<sup>(20)</sup>。

b は須磨巻の美文として名高い場面であり、在原行平や白居易を思い起こさせる和歌・漢詩の引用によって須磨に蟄居した光源氏の左遷の境遇を暗示し、憂愁や人恋しさなどの心情を表現している。

このように、和歌のイメージや歌ことばの連想体系（および漢詩）は物語の展開を牽引・暗示し、登場人物や語り手の心理の表象・比喩となって物語に奥深さを与えるが、このあと各場面は和歌的世界によって示された旧懐や憂愁の念を引き継ぎつつも、a はその前後の巻々の内容を背景とした、時世の変化における人心の移り

変わりを批評する語りに、b は光源氏と従者たちの結束力や、京の恋人たちとの和歌贈答を語る場面に、それぞれ繋がってゆく。つまり登場人物の細やかな内面描写と因果律に支えられた物語の中に、和歌的世界は回収されてゆくのである。

それに対して、雲雀子巻は a・b と同様に和歌のイメージや歌ことばの連想体系と密接なかわりを持つにもかかわらず、細やかな内面描写や因果律による物語に回収されることがない。雲雀子巻の場合は、歌ことばの連想によって転じた場面そのものが氣象風景となり、歌ことばのつらなりそのものが物語の筋となる。歌ことばは単なる修辭のレベルを超えて物語そのものを作っている。

おわりに

本稿をとおして、雲雀子巻が歌ことばの連想体系（和歌的世界）と密接な関係にあることが見えてきた。これまで否定されてきたが、『雲隠六帖』が連歌とも深くかわっていることも見えたと思う。『雲隠六帖』と連歌との関わりを雲雀子巻以外の巻々のなかにも見出すことが今後の課題となろう。

それにしても、雲雀子巻は仏教的世界のほうへと、登場人物を、そして読者を引き込もうとする。雲雀子巻は和歌的世界とかかわりつつも、和歌連歌を詠むために作られた『源氏物語』梗概書とはテーマを異にすると言わざるをえない。仏教的世界観こそが、『源氏物語』とも『源氏物語』を要約した梗概書とも違う点であり、『雲隠六帖』のテーマである。梗概書を補うものとかんたんに論じ

こうした仏教的色合いの強い『雲隠六帖』があらすじ的文体であることにはどのような意味があるのだろうか。

三田村雅子氏は、応仁の乱前後の『源氏物語』享受のありかたとして、貴族・武家・連歌師・能楽師などを伝達者として挙げながら、身分・階級を超えて多くのひとびとに『源氏物語』が開かれていく「座」を想定した。ここでは、連歌や夢幻能などの形をとって、『源氏物語』が解体・再構築されていたという<sup>(21)</sup>。

これには、『源氏物語』が梗概書によってあらすじで伝わっていたことが大きく関わっているだろう。梗概（あらすじ）であることによって、『源氏物語』の細かい内面描写や因果律にとらわれず、物語を自在に伸縮させることが可能となるからである。三田村氏はさらに、紫の上の亡霊が桜樹の下で勾宮即位を祝福する桜人巻の場面をはじめとした「紫上中心に再構成」される『雲隠六帖』の「霊的世界」を、「中世的な夢幻能の世界に連なる」ものと意義づけ<sup>(22)</sup>、『雲隠六帖』のテキストが身体化する可能性を見ている。

『雲隠六帖』が梗概書であることの意味は、そこにあるのではないだろうか。『源氏物語』があらすじで伝わったからこそ、仏教的方向へ大きくふりきれた『雲隠六帖』が生まれえた。そして『雲隠六帖』じたいも『源氏物語』と同様にあらすじとして伝わることによって、身体化され、イメージ化され、あらたな物語に発展してゆく契機をはらんでいる。

『雲隠六帖』は、人物の内面描写や因果律を物語内部に書き尽くし、完結させなかった。語り手が、細かな状況や心情描写に縛られることなく歌言葉の連想体系によって自在に内容を膨らませながら

物語を語り伝えてゆけるような、物語外部に開かれた新たな物語創作方法をとった。そのことは、『雲隠六帖』が、『源氏物語』に素材をかりた宗教文学として、さまざまな説教の場で語られることを可能にしただろう。現存する二種類の伝本も、そのような宗教的な場での語りとなんらかの関係があると考えているが、それについては稿を別に論じたいと思う。

#### 参考文献

- (1) 『今鏡』は、『源氏物語』作者・紫式部に対し、「女の御身にてさばかりのことを作り給へるは、ただ人にはおはせぬやうもや侍らん。妙音観音など申すやんごとなき聖たちの、女になりましたまひて法を説きてこそ人を導き給ふなれ(略) 物語などいひて、一巻、二巻の書にもあらず、六十帖などまで作り給へる書の、(略) ものの心をわかまへ、悟りの道にむかひて、仏の御法を広むる種として、荒き言葉もなよびたる言葉も、第一義とかにも返し入れんは仏の御心ざしなるべし。」と評している(本文は板橋倫行氏校註『今鏡』(朝日新聞社、一九六五年)、巻十による。ただし私に漢字に直し、ルビを振った)。

- (2) その具体的ありようは、伊井春樹氏『源氏物語の伝説』(昭和出版、一九七六年)、伊井春樹氏『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂出版、二〇〇一年)、小川陽子氏『源氏物語』享受史の研究 付『山路の露』『雲隠六帖』校本』(笠間書院、二〇〇九年)などに詳しい。

(3) 前掲注2・小川氏は、「あえて六帖を自ら新作すること  
で『源氏』六十巻を完成させようとしたのは、『源氏』へ  
の並々ならぬ関心と同時に、天台六十巻への強い執着が  
あつてのことにはかなるまい」とも論じる。以下、小川氏  
の論文引用はすべてこの著書による。

(4) 稲賀敬二氏『源氏物語の研究―成立と伝流―』笠間書  
院、一九六七年による。

(5) 小川氏は、蓬左文庫蔵本『雲隠六帖』の奥書にある「有  
馬越中入道徳円」の仕えた肥前有馬氏と有馬出身の連歌師  
周桂の關係に注目し、『実隆公記』や『弄花抄』にも名前  
が見える『源氏物語』伝授者周桂の存在を、徳円が『雲隠  
六帖』を写す環境の中に透かし見ている。

(6) 逢左文庫本『雲隠六帖』雲隠卷(五丁ウ)に、「かくて  
嵯峨の院にも六条院にも一年に三度ばかりづつさしのぞき  
たまへども」とある。

(7) 入江康平氏『弓射の文化史【原始―中世編】―狩猟具か  
ら文射・武射へ―』(雄山閣、二〇一八年)による。なお  
入江氏によれば、元禄時代の文献に、遠矢が約四〇〇メー  
トル前後飛んだという記録があるという。新編日本古典文  
学全集では、おもに『保元物語』『平家物語』『太平記』に  
用例が見える。一例として『平家物語』巻第十一・遠矢の  
場面を挙げる。

そのなかにこととはう射たるとおほしきを、「その  
矢給はらん」とぞまねいたる。新中納言これを召し

寄せて見給へば、白篋に鶴の本白、鴻の羽をわりあ  
はせてはいだる矢の、十三束二伏あるに、沓巻より  
一束ばかりおいて、「和田小太郎平義盛」とうつしに  
てぞ書きつけたる。平家の方に勢兵おほしといへど  
も、さすが遠矢射る者はすくなかりけるやらん、良  
久しうあつて、伊予国の住人新居の紀四郎親清召し  
いだされ、この矢を給はつて射かへす。これも奥よ  
りなぎさへ三町余をつつと射わたして、(『平家物語』  
②三七六)

右によれば、射者・紀四郎親清の飛ばした遠矢は三町余、  
三百メートル以上である。

(8) 咲本英恵「『雲隠六帖』「雲雀子」考察」共立女子大学  
『文学芸術』三五号、二〇一一年七月

(9) 田口栄一氏『すぐわかる源氏物語の絵画』(東京美術、  
二〇一一年)には、「大堰の山莊を出て、源氏はほど近い  
嵯峨野に普請中の桂の院に向かい(略)饗宴を催した。  
(略)鶴飼や管弦、さらには帝から歌を賜るなど豪華な催  
しにもかかわらず、それらは描かれず、何故か小鷹狩をし  
ている遅参した君達が、獲物の小鳥を萩の枝につけた物を  
土産として源氏に献じる様が本文のささやかな一節から選  
ばれて常套的なモチーフとなっている」とある。

(10) 伊井春樹氏編『弄花抄付源氏物語聞書』(桜楓社、  
一九八五年)による。

(11) 石田譲二氏・茅場康雄氏編『改訂版』源氏大鏡』(古典

文庫、一九八九年)による。

- (12) 中野幸一氏編『源氏一部抜書 源概抄 源氏こか、み源氏小鏡 光源氏一部譚并詞』(武蔵野書院、二〇一〇年)による。

- (13) 山本利達氏・石田譲二氏校訂『紫明抄・河海抄』(角川書店、一九六八年)による。なお、『増鏡』第十一「老のみ」には、後深草院・龜山院の秋の日の伏見津遊覧のことが次のように語られている。

二、三日おはしませば、兩院の家司ども、我劣らじといかめしき事ども調じて参らせあへる中に、山も、の二位兼行、檜破子どもの、心ばせありて仕うまつれるに、雲雀といふ小鳥を萩の枝につけたり。源氏の松風の巻を思へるにやありけん。(岩佐正氏・時枝誠記氏・本藤才藏氏『日本古典文学大系 神皇正統記 増鏡』岩波書店、一九七〇年)

池田亀鑑『源氏物語大成』によれば、右の場面は河内本系統本文では「小鳥を木の枝につけたり」、青表紙本系統本文では「小鳥を萩の枝につけたり」とあるため、「小鳥」を「雲雀」と解釈する楊梅(藤原)兼行や『増鏡』作者(語り手)がどの『源氏物語』本文に依拠したのか、不審である。が、ここでは雲雀を萩の枝につけたことが松風巻の小鷹狩人を連想させているということに注目したい。

- (14) 以下、連歌の引用はすべて連歌データベース(国際日本文化研究センター、[tois.nichibun.ac.jp/database/html2/](http://tois.nichibun.ac.jp/database/html2/))

[renga/menu.html](http://renga/menu.html)) による。

- (15) 片桐洋一氏『新日本古典大系 後撰和歌集』岩波書店、一九九〇年

- (16) 久曾神昇氏編『日本歌学大系』別巻二、風間書房、一九八三年。川村晃生氏校注『歌論歌学集成』第五巻(三弥井書店、二〇〇〇年)には、「白きを、雪をあはする」との異同がある。

- (17) 前掲注16久曾神昇氏による。なお、川村晃光氏校注『歌論歌学集成』第四巻(三弥井書店、二〇〇〇年)も同内容。

- (18) 本藤才藏氏・重松裕己氏校注『連歌論集(一) 中世の文学』(三弥井書店、一九七二年)所収『連珠合璧集』より引用。

- (19) 前掲注18『連珠合璧集』には、次のように「面影」と「夢」が連想体系にあることがわかるが、なかでも次の傍線①②に注目したい。

648 面影トアラバ、(『連珠合璧集』)

花月雪 <sup>①</sup>まの、かや原鏡 <sup>②</sup>玉かづら <sup>伊勢</sup>夢

傍線①「まの、かや原」は「陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを」(万葉集・巻第三・三九六・笠女郎が大伴宿禰家持に贈る歌三首/古今和歌六帖、巻四、笠女郎、訳・陸奥の真野の萱原は遠いけれど、あなたを思えば(あなたが思ってくれるなら)、面影になってお姿が見えるといいますのに)が、傍線②「玉かづら」は「人は



いさ思ひやすらん玉かづらおも影にのみいと見えつつ」  
『伊勢物語』二二段、訳…あなたが私を思ってくれている  
かはわからないが、あなたのお姿は面影となつて繰り返し  
繰り返しわたしには見えていますよ）がもととされる。兩  
歌から、相手を思い、また思われると相手の面影が見える  
という発想のあることが見て取れる。なお四角粹を付した  
ように、面影は夢とも連想体系にある。

- (20) 本文aの歌ことばの連想体系については、神野藤昭夫氏  
「『花散里』」巻をどう読むか―その和歌的発想と表現―  
『源氏物語の鑑賞と基礎知識』花散里』至文堂、  
二〇〇三年）を参考にした。

- (21) 三田村雅子氏『記憶の中の源氏物語』新潮社、二〇〇八  
年

- (22) 三田村雅子氏「偽書の中の源氏物語」（千本英史編『日  
本古典偽書叢刊』第二巻、月報）現代思潮社、二〇〇四年  
※特に断らない限り、散文は新編日本文学全集（小学館）に、和  
歌は『新編国歌大観』による。